

# アメリカ文学と野球の 深い関係



柴田元幸

(アメリカ文学者・翻訳家)

昨年4月30日、77歳で逝去した現代アメリカ文学の巨星、ポール・オースター。年末に待望の日本語訳版が刊行された『4321』は、2段組み800ページ、88万字の超大作だ。小説の舞台は1950年代から70年代のアメリカ・ニューヨーク。主人公の思春期、青春期と共に、激動の時代の歴史的事件が描かれる。ケネディ暗殺、ベトナム反戦、公民権運動などと並び、印象的なモチーフとなっているのが、「ブルックリン・ドジャースの口サンゼルス移転」だ。

本作に限らず、オースターの小説には野球がよく登場する。アメリカ文学と野球——そこにはどんな関係があるのか。オースター作品をはじめ数多くのアメリカ文学の翻訳を手がけてきた柴田元幸氏に、野球関連の著作もあるノンフィクション作家の田崎健太氏が聞いた。

## 野球は本質的に「アメリカ的」

——柴田さんが翻訳されたポール・オースターの新作『4321』の舞台はニューヨーク。そこにブルックリン・ドジャースとニューヨーク・ジャイアンツが出てきます。ドジャースとジャ

イアンツは1958年にそれぞれロサンゼルスとサンフランシスコに移転します。登場人物たちはその移転を悔しがっている。

**柴田** 野球チームがない州がほとんどだったのに、(ヤンキースを含めると)一つの街に三つもチームがあったこと自体が贅沢ですよ。今はヤンキースとメッツ(62年に誕生)の二つでちょうどいいんじゃないかと思うんだけど、当時のニューヨークにとってはそうじゃないんでしょう(笑)。

——オースター原作の映画『スモーク』(95年)もブルックリンが舞台で、ハーヴェイ・カイトル演じる主人公が経営するタバコ屋で、野球が話題になっているシーンから始まっています。

**柴田** 「なぜあいつをトレッドに出したんだ」とかね。ああいう光景はアメリカの地方でもあるのかな。ダイナーでそういう会話があったとしても、映画の一場面にはなりにくいんじゃないか。野球がローカルなコミュニティの一部分として定着しているのは、ニューヨーク独特の現象かもしれないですね。

——それにしてもオースターの作品には野球がよく出てきます。

## ポール・オースター

Paul Auster

1947年、米ニュージャージー州ニューアーク生まれ。コロンビア大学で英文学と比較文学を専攻。大学院中退後にフランスに渡る。詩、評論、翻訳等を手がけたあと、85年から86年にかけての「ニューヨーク三部作」(『ガラスの街』『幽霊たち』『鍵のかかった部屋』)で小説家として世界的に注目を集める。以後、現代アメリカ文学を代表する作家として活躍し、『孤独の発明』『ムーン・パレス』『偶然の音楽』『リヴァリアサン』『ナショナル・ストーリー・プロジェクト』『幻影の書』『オラクル・ナイト』『ブルックリン・フォリーズ』『写字室の旅』『闇の中の男』『冬の日誌』『内面からの報告書』『インヴィジブル』『サンセット・パーク』など多数の著作が邦訳されている。2024年死去。  
写真= Getty Images



しようとして野球カードゲームを作ったけど売れなかった。次に野球をモチーフとした『スクイズ・プレー』という推理小説を書いた。この頃からもう野球のことしか考えていなかったんじゃないかな(笑)。

——ポール・ベンジャミン名義で出した『スクイズ・プレー』は私立探偵の主人公が、脅迫状を受け取った元メジャーリーガーの相談を受ける場面から始まるハードボイルドでした。レイモンド・チャンドラーを思わせる文体で、野球が効果的に使われていましたね。

**柴田** フィリップ・ロスの『素晴らしいアメリカ野球』(73年)、ロバート・レッドフォードが映画にしたバーナード・マラマッドの『ザ・ナチュラル』(52年)、ロバート・クーパーの『ユニヴァーサル野球協会』(68年)など、野球を主題とした小説はたくさんあります。ところがこうした作品からは、そこまで野球愛は感じられない。あくまで野球を使って寓話を語っている。むしろ『スクイズ・プレー』をはじめ、野球を隠し味的に使うオースター作品のほうに愛を感じます。オースターは野球が本質的にアメリカ的だという実感を持っていたと思います。

——野球が「アメリカ的」というのはどういう意味でしょうか？

**柴田** たとえば、バスケットボールでは黒人選手の優秀さが突出している。アメフトはもともとイギリスにフットボールがあつて、「アメリカン」と付けた。ホットケーキにしてもアメリカ全体を象徴しているという印象ではない。ベースボールはアメリカで生まれたスポーツ。クリケットと近いけど、全く違う。野球はアメリカ独自のスポーツだという意識をアメリカ人は持っていると思います。1947年に黒人選手のジャ

ッキー・ロビンソンがメジャーリーグに入ってから以降、今では日本人メジャーリーガーも続々と誕生している。男性に限った話ではあるけれど、能力があれば人種や国籍を問わず誰でも受け入れられて、チームとして一つになれるという幻想が野球にはあるんじゃないでしょうか。

——メジャーリーグは1890年以降、有色人種排除の方針を採っていました。それ以前にも黒人選手がプレーしていた記録はありますが、近代メジャーリーグとなってからは、ブルックリン・ドジャースに入団したジャッキー・ロビンソンが初の黒人選手となりました。

**柴田** ジャッキー・ロビンソンがメジャーでプレーしたことは、野球に限らずアメリカの歴史上でエポックメイキングな出来事でした。もつとも当時は人種差別が根強い時代でしたから、彼はすさまじい脅迫、ヤジ、ボイコットなどとも戦わなければならなかったけれど。

——オースターの『幽霊たち』(86年)では主人公の探偵「ブルー」がジャッキー・ロビンソンの活躍を追ってドジャースのホーム球場、エベッツ・フィールドまで行く場面がありましたね。

**柴田** 今のメジャーを見ると白人、黒人、ヒスパニック、日本人などさまざまな選手がいる。いろんな場所から来た人間が一つになれるという

のが本来のアメリカの姿でしょう。でも現実の社会はそうなっていない。野球はアメリカの叶わぬ理想を体現する場所なのかもしれません。

——さきほど、フィリップ・ロスの『素晴らしいアメリカ野球』の話が出ました。ハチャメチャな内容ですが、この本の原題は『The Great American Novel』なんですね。

**柴田** そうです。「偉大なるアメリカ小説」。自身は紛れもなく野球の話ですが、この小説が書かれた70年代初頭はアメリカの強さ、正しさ、偉大さが大いに疑われていた時期。そうした流れの中で付けられたタイトルなんです。

——ベトナム戦争が泥沼化した時代。「Great」は「偉大な」とストリートに講えているわけではなく、アメリカの矛盾を揶揄していること？

**柴田** そう思います。

——その意味では今、トランプ大統領が「Make America Great Again」と掲げているのは興味深いですね。

## 村上春樹とポール・オースター

——ところで、柴田さんご自身の野球との出会いはいつですか？

**柴田** テレビが世の中に出てきた頃ですね。テ

## 『4321』 ポール・オースター 柴田元幸 訳

新潮社 7150円(税込)

1947年生まれの主人公、アーチボルド・ファーガソンが子どもから大人へと成長していく姿を、「私の知る限り、この形式で小説を書いた人は誰もいない」と著者自身が語るように、幻影的な「四重奏スタイル」で描き出す。政治、事件、芸術、スポーツ、あらゆる事象をモチーフにアメリカ激動の時代を写す、オースター69歳(原著発表時)の最高傑作である。

